

平成 29 年度九州大学医学部医学科・生命科学科卒業式 医学部長式辞（2018 年 3 月 20 日）

「卒業生の皆さんに贈る：心優しき未来のプロフェッショナルに」

九州大学医学部の生命科学科ならびに医学科を卒業する皆さん、おめでとう。九州大学医学部を代表して、生命科学科の諸君は 4 年間、医学科の諸君は 6 年間、これまでの皆さんの努力と研鑽を心より讃えたいと思います。また、これまで、長年にわたって皆さんを支えてこられたご家族の方々に対しましても、謹んでお慶びを申し上げます。

皆さんの中には、これから研修医として医療現場に赴く人、大学院に進学して研究者への本格的な歩み始める人、あるいは医学部で学んだことを基礎として新しい分野に挑戦する人、様々な人がいることと思います。皆さんの今後の健闘を九州大学医学部教職員一同、心から祈っております。

卒業とは、言うまでもなく 1 つの出発です。これから皆さんは、医師あるいは医学・生命科学の研究者という「プロフェッショナル」としての第一歩を踏み出すこととなります。

プロフェッショナルとは、現状に満足せず、一生学び続ける人のことです。「ようやく卒業と思ったら、まだ勉強ですか？」と思った人も多いかもしれませんね。実は、今までの勉強よりも、これからの勉強の方がずっとずっと楽しいのです。だから、一生学び続けることも、君たちが想像しているほど難しいことではありません。アマチュアである学生の時の言わば「傍観者としての勉強」と、プロフェッショナルになって「現場と向き合った時の勉強」は、同じ勉強でも全く違ったものです。是非、楽しみにして下さい。

御存知の人も多いかと思いますが、インド建国の父、平和を紡ぐ人マハートマ・カンジーのことばとして、次のような文章が伝わっています。「Live as if you were to die tomorrow; learn as if you were to live forever.」。明日死んでもいいように生きなさい。そして、永遠に生き続けるかのように学びなさい（注 1）。プロフェッショナルがなすべきことも同じではないかと思います。

そして、時に、過去を振り返ることも必要です。1903 年（明治 36 年）に京都帝国大学福岡医科大学として創設された九大医学部は 115 年の歴史を持ちます。新しい新しいと思っていた生命科学科も設置から 11 年が経ちました。これまでに、九大医学部は、世界に誇るべき多くの研究業績や治療実績を残し、医学と医療の発展に大きく貢献してきました。この建物のすぐ前の庭園の一角には、同窓会の方々のご尽力により、3 年前に開館した「九州大学医学歴史館」があります。「先輩達が何を考え、何を目指したか、そして何を成し遂げたか」、それぞれがよく分るように、さまざまな資料が展示されています。

過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります（統一ドイツ最初の大統領ヴァイツゼッカーの言葉です）（注 2）。九大医学部の長い歴史の中では、深く反省すべきことも起こりました。その 1 つが、第 2 次世界大戦末期に九大医学部でおきた生体解剖事件です（注 3）。「捕虜となったアメリカ人兵士に対して生体実験を行い、死に至らしめた」という非人道的な事件であり、戦争末期の狂気の中で起こったこととは言え、『医師としてのモラル』と『医学者としての研究倫理』に反するものでした。この事件のような負の部

分も含めて、過去を冷静に見つめ直すことが、私たちを正しい道へと導いてくれるものと信じています。「歴史に学んでいるからこそ、九大医学部およびその卒業生は一段と高いモラルをもっている」、そのようにありたいと考えています。

皆さんの未来には、必ずしも喜びばかりではなく、予想もしなかった困難が待ち受けているかもしれません。しかし、医学を学んだ者として、医学・医療に携わる者として、「生命に対して謙虚に向き合うこと」を決して忘れないでほしいと思います。生命に対して謙虚であることを忘れなければ、大きく道を踏み外すことはありません。

皆さんには、「心は優しく」そして「志を育み続ける」、そのようなプロフェッショナル、医学研究者・医療人そして社会人になって頂きたい、と切に願っています。

「心優しく」あるためには、他人を思いやる想像力が必要だと思います。その「想像力」の源のひとつは、「しなやかな心」ではないでしょうか。「清く正しく美しく」という言葉を聞いたことがあるかと思います。これは実は宝塚音楽学校の校則でもあり、これはこれで大変結構なのですが、これを、しなやかな心でもって多少変形して「清く楽しく美しく」という風にしたいと思います。これは実は、私のオリジナルではなくて、かのキョンキョンの言葉です（注4）。皆さん、キョンキョンを御存知ですか。私が20代の頃には、アイドル中のアイドルで、今は女優として大活躍しています。もし知らない人があれば、後でお父様、お母様に聞いてみて下さい。

また、「しなやかな心」で、『忘れていいこと』、『忘れてはいけないこと』、そして、『忘れなくてはいけないこと』をきちんと仕分ける判断力を磨いてほしいと思います（注5）。これら3つのことをきちんと仕分ける力のことを、昔から「教養」と呼んできました。皆さんには、真の「教養」を身につけた「心優しい」プロフェッショナルになってもらいたい、と切に願っています。ちなみに、私が皆さんに講義してきました生化学は「忘れていいこと」には入りませんので、呉々もご注意下さい。

さて、「教養」を身につける、と言っても王道があるわけではありません。多くの分野、様々な立場の人と接することも、とても大切です。そして、是非、時間をつくって本を読んでほしいと思います。それも縦書きの本です。横書きの専門書はこれからいやというほど読むでしょうが、人間のことは、むろん医学だけでわかるものではありません。「最後は必ず死ぬと分かっているのに、なぜ人は生きていけるのか」、その根源的な理由を考えるのが哲学であり人文系の学問です（注6）。時に、そのような人文系の縦書きの本を読み、考える時間を作って欲しいと思います。

「しなやかな心」を保つには、「たくましく」生きていくことも必要です。

皆さんは正岡子規を御存知と思います。「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の子規です。今年、明治維新、明治元年からちょうど150年に当たります。子規は、俳句および短歌の維新／近代化をやった人ですが、明治35年に35歳目前（数えでは36歳）の若さで無くなります。脊髄カリエスのために、最後の数年は寝たきりの状態でした。その子規が、亡くなる3ヶ月半前に、次のように記しています。「余は今まで、禅宗のいわゆる悟りということに誤解していた。悟りという事は、いかなる場合にも平気で死ぬる事かと思っていた

のは間違いで、悟りという事は、いかなる場合にも平気で生きる事であった。」（注7）。

では、どうしたら「いかなる場合にも平気で生きていける」ようになれるのか。

平気で生きていくことの秘訣、逞しく生きていくことの秘訣の1つは、「しっかり食べる事」かもしれません。子規は、寝たきりでしたが、よく食べました。亡くなるちょうど1年前の明治34年9月19日付の日記にはこう書かれていました（注8）。

朝飯：かゆ3碗、佃煮、奈良漬。

午飯：冷飯三碗、鰹の刺身、味噌汁、佃煮、奈良漬、梨1つ、葡萄1房。

間食：牛乳五勺、菓子パン、塩せんべい、飴1つ、渋茶。

晩飯：粥3碗、どじょう鍋、キャベツ、ポテト一、奈良漬、梅干、梨1つ。

なんとあっぱれな食欲でしょう。柿の季節には、1日に3つも4つも柿を食べていたようです。これだけ食べて、病床で痛みに耐えながら、古来の俳句・短歌を徹底的に研究し、俳句・短歌の維新／近代化を押し進めたわけです。まさに「Learn as if you were to live forever.」です。

ちょうど1年ほど前に放送されていた坂元裕二脚本のテレビドラマ『カルテット』で、「泣きながらご飯食べたことある人は、生きていけます。」という台詞が出てきました（注9）。「もう、どうにもならなくなっちゃった」という状態になっても、とにかくしっかり食べてさえいれば、大丈夫、きっと体の方が心を助けてくれる時がきます。

皆さんの中には、残念ながら今回の医師国家試験に不合格だった人もいるかと思います。ひとつ忘れないでほしい。皆さんは自分自身で考えているよりもずっと若い。これからの人生の方がずっとずっと長いのです。少々遅れても何ということはありません。顔を上げ、背筋を伸ばして、そして、しっかり食べて、したたかに頑張っただけでいいと思います。

「心優しくある」とともに、皆さんには、目標を高く掲げ、「志（こころざし）」を育んでほしいと思います。世界中の先達たちによって培われてきた医学・医療、その膨大な遺産を、ただ手軽に消費するだけ、既存のテクニックを身に付けマニュアルを単にこなすだけ、といったレベルで満足してほしくはありません。目標を高く掲げて、常識を疑い、根本的な問題にチャレンジしてほしいと思います。世界中の先輩たちによって培われてきた医学・生命科学の膨大な遺産に対して、皆さんの手で、小さくとも確かなものを追加してもらいたい、と願っています。医学・生命科学の発展・進歩の大部分は、実は、このような小さな追加の積み重ね、いわば先輩から後輩への地道なリレーによって成し遂げられてきたものなのです。

「巨人の肩の上」という言葉を御存知でしょうか？「Google Scholar」のトップページには「巨人の肩の上に立つ Stand on the shoulders of giants (OTSOG)」という標語が掲げられています。「先人の残した仕事をもとにして始めて新たな創造がなされる」ということですが、かの偉大な科学者ニュートンでさえも「もし私がさらに遠くを見ることができたとなれば、それは巨人たち（すなわち先人たち）の肩の上に乗ったからです」と言わざるをえませんでした（注10）。しかも、この「巨人の肩の上」という比喩自体も先人のものでした。ニュートンに先立つこと500年、12世紀ルネッサンスを担ったフランスの学者シャ

ルトルのベルナールは、常々こう言っていました。「我々は巨人の肩の上に乗っている小人のようなものである。それゆえ、我々はその巨人達よりももっと多くのものを見ることができるし、もっと遠くまで見ることもできる。」（注 11）。ニュートンでさえ、サイエンスの上でも比喻を使う上でも、先人からのバトンをひと時預かった数多くの「リレーランナー」の一人に過ぎませんでした。

大切なことは、このリレーには誰でも参加できるということです（先に述べたように、医学・生命科学の発展・進歩の大部分は、天才の仕事というよりも、多くの平凡なプロフェッショナルによる小さな追加の積み重ね、先輩から後輩への地道なリレーによって成し遂げられてきたものです）。どうか、皆さんも、この「地道だけれども実り多きリレー」に、積極果敢に参加して頂きたいと思います。

そして、皆さん一人一人の「志」をじっくり育てほしい、と思います。

誰でも最初の「志」は、小さすぎたり、大きすぎたりで、不釣り合いなものです。むしろそれが当たり前でしょう。「幾たびか辛酸を歴（へ）て志始めて堅し」というのは、セゴドンこと西郷隆盛の漢詩の一節ですが（注 12）、一人一人がそれぞれに異なる現実を見据え、自分自身の「志」を育むには、往々にして時間がかかるものです。試練に耐えて長続きしなくては、「志」は育ちません。その人の「志」が何であったかは、逆説的ではありますが、長続きした後で始めて、いわば事後的に解るようなものでありましょう。そして、之を好む者は之を楽しむ者に如かず（注 13）、楽しくないことは長続きしません。やはり、「清く美しく美しく」でなくてははいけませんね。一方で、ある程度はがまんして自分を鍛えなければ、本当に楽しいことが何であるかは見えてきません。「Learn as if you were to live forever.」永遠に生き続けるかのように学び、自分自身の「志」をじっくり育てほしいと思います。

どうか皆さん、心優しく、志を育み、そしてしなやかに、たくましく生きて下さい。そして、皆さん一人一人が、幸運（さいわい）に恵まれ、人生を心から楽しみ、悔いのない一生を送られますことを祈念しつつ、私からの式辞とさせていただきます。

皆さん、卒業本当におめでとう。

2018年3月20日 九州大学医学部長 住本 英樹

注（参考のために）

(1) 類似の言葉を古来幾人もの先覚が述べている。このことばは、21世紀においても世界各地の民主化運動や人権擁護運動に、あるいはバラク・オバマ前大統領やアップルのステイブ・ジョブズに影響を与えてきた「ガンディー自身の生き方」（例えば、竹中千春『ガンディー 平和を紡ぐ人』岩波新書、2018）と重ねられることで、「ガンディーのことば」

として人口に膾炙してきたものと思われる。ソチ五輪（2014年）でメダルを逃したスピードスケートの小平奈緒選手は、平昌（ピョンチャン）五輪を前にした2017年、この「ガンディーのことば」とともに抱負を語った（各種新聞等報道）。今年2月開催の平昌五輪において、スピードスケート女子500メートルで金メダル、同1000メートルで銀メダルをみごと獲得したのは御存知のとおりである。

(2) リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領（西ドイツ最後の大統領にして統一ドイツ最初の大統領）が、ドイツ統一が実現する4年前の1985年5月8日、第2次大戦でのドイツの敗戦40周年にあたって、西ドイツの国会で行なった演説「荒れ野の40年」（「荒れ野（あらの）の40年」と訳されることも多い）の中の言葉。永井清彦（編・訳）『言葉の力 ヴァイツゼッカー演説集』（岩波現代文庫、2009）にも収録されており、そこでは11頁に出てくる。「非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」と続く。この演説の結び近くでは、「かつて起ったことへの責任は若い人たちにはありません。しかし、歴史のなかでそうした出来事から生じてきたことに対しては責任があります。」と語りかけ、そして「人間は何をしかねないのか—これをわれわれは自らの歴史から学びます。」と述べる。

(3) 九州大学生体解剖事件の概要：第2次世界大戦末期の1945年5月から6月にかけて、帝国陸軍監視のもと、九州帝国大学（現九州大学）医学部外科の教官らが、解剖実習室を使用し、本土空襲で捕虜となった米軍爆撃機B29の搭乗員8名を対象として生体実験を行い、全員を死に至らしめた事件である（一般に「生体解剖事件」として知られるが、九大事件は正確には、「生体解剖」ではなく「生体実験と遺体解剖」である）。実験の主な目的は、『九州大学五十年史』（1967年）によれば、「人間は血液をどの程度に失えば死ぬのか、血液の代用として生理的食塩水をどれ程注入できるか、どれだけ肺を切りとることが可能か」などであったといわれる。戦後、軍および九州帝国大学の関係者合わせて30人が起訴され、BC級戦犯を裁く横浜の軍事法廷（横浜裁判）にて審理が行われた。この裁判において、九州帝国大学および同医学部が本事件に組織的に関与したとはみなされなかったが、1948年8月27日、死刑判決の5人を含む計23人が有罪判決を受けた（後に減刑）。2015年、九州大学医学部教授会は以下の決議を行い、この決議を、教員・職員・学生とともに将来にわたって遵守することを決意した。決議（2015年3月4日開催の九州大学医学部教授会）：私たちは、非人道的な生体解剖事件の犠牲となり亡くなった米国人兵士に対して改めて心より哀悼の意を表すとともに、判決後の1948年9月開催の九大医学部の「反省と決意の会」において先輩たちが決意した医師としてのモラルと医学者としての研究倫理（「医学研究および研究のありかたについて反省し、われらは医師として人間の生命及び身体の尊厳についての認識を一層深くするとともに、その天職をまもりぬくためには、たとえ国家の権力または軍部等の圧力が加わっても、絶対にこれに屈従しない」）を再確認し、今後もこの決意を引き継ぐことを固く誓う。以上、九州大学医学歴史館1階の「生体解剖事件」のパネルより抜粋。九州大学の記録としては、『九州大学五十年史 通史』（1967）553～556頁、『九州大学七十五年史 通史』（1992）79～80頁、『九州大学百年史 第5巻：部局史編

Ⅱ』(2018) 11-12～11-13 頁。また、熊野以素『九州大学生体解剖事件-70年目の真実』(岩波書店, 2015)。さらに、林博史『BC級戦犯裁判』(岩波新書, 2005)、半藤一利・秦郁彦・保阪正康・井上亮『「BC級裁判」を読む』(日経ビジネス人文庫, 2015):それぞれ 83 頁、366 頁で取り上げられている。

(4) 小泉今日子『原宿百景』(スイッチ・パブリッシング, 2010) 106 頁。ちなみに小泉今日子の 8 枚目のオリジナルアルバムは『今日子の清く楽しく美しく』(1986 年リリース: 大ヒット曲「なんてったってアイドル」を収録。この曲には「清く正しく美しく」という歌詞が出てくる)。

(5) 鷺田清一『語りきれないこと—危機と傷みの哲学』(角川 one テーマ 21, 2012) 82 頁, 166 頁。鷺田清一『おとなの背中』(角川学芸出版, 2013) 195 頁。「ものごとの軽重を見きわめる眼差し」(価値の遠近法)すなわち「どんな状況にあっても絶対なくしてはならないもの/見失ってはならぬものと、あってもいいけどなくてもいいものと、端的になくていいものと、絶対にあってはならないものを見分けられる眼力」の必要性を説き、こういう力があることを「教養がある」というのだ、と述べる。そして、河瀬直美監督/脚本の映画『沙羅双樹』(2003 年公開)の中の言葉「忘れていいことと、忘れたらあかんことと、ほいから忘れなあかんこと」に同様の眼差しをみる(『語りきれないこと—危機と傷みの哲学』100 頁; 『おとなの背中』186 頁, 226 頁)。

(6) 例えば、内田樹『寝ながら学べる構造主義』(文春新書, 2002)。例えば、平原卓『読まずに死ねない哲学名著 50 冊』(フォレスト出版, 2016)、深井智朗『プロテスタンティズム』(中公新書, 2017)、三谷尚澄『哲学しててもいいですか?—文系学部不要論へのささやかな反論—』(ナカニシヤ書店, 2017)。また、渡辺浩『日本政治思想史—十七—十九世紀』(東京大学出版会, 2010)。あるいは、長田弘『詩人の紙碑』(朝日選書, 1996)、原田マハ『いちまいの絵 生きていうちに見るべき名画』(集英社新書, 2017)。

(7) 正岡子規『病牀六尺』岩波文庫版(1927; 改版 1984)では 43 頁にこの記載がある(明治 35 年 6 月 2 日付の文章)。子規は明治 35 年 9 月 19 日没。死の前日に詠んだ句に「糸瓜咲て痰のつまりし佛かな」など。最後まで滑稽の精神(自己を客観化する精神)を失わず、「平気で生きていた」ように私には思える(蛇足ながらこの佛はもちろん子規自身のこと)。俳句や短歌さらには漢詩を実際につくる一方で子規は、病床にありながら、12 万を超える近世の句を収集してそれを分類し「俳句分類」を編んだ(重ねると人の背を超える高さになったという)。体系的に分類するという行為は科学の第 1 歩である。子規という詩人は、俳句を科学した人でもあった。

(8) 正岡子規『仰臥漫録』岩波文庫版(1927; 改版 1983)では 53 頁にこの記載がある(明治 34 年 9 月 19 日付の文章)。

(9) 坂元裕二のオリジナル脚本による連続テレビドラマ『カルテット』は 2017 年 1 月～3 月に放送された。その第 3 話で、故あって長年疎遠だった父(高橋源一郎)の死の直後、すぐそばに来ているのに戸惑ってしまって会いに行けずにいる世吹すずめ(満島ひかり)は、巻真紀(松たか子)と二人でカツ丼を食べる、がつつと。その時、すずめの涙をち

らっと見て、真紀が発した言葉がこの「泣きながらご飯食べたことある人は、生きていきます。」。シナリオは、坂元裕二『カルテット 1』（河出書房新社，2017）151 頁。

(10) 中島秀人『ロバート・フック ニュートンに消された男』（朝日選書，1996）222 頁。アイザック・ニュートンからロバート・フックに宛てた書簡の中にある文章で、それは（両者の間で論争中だった光学に関する各々の業績に関して）和解への申し出に合意を示す書簡であった。ニュートンは、同時期の別人宛の書簡でも「自分がフックに負っているのと同様に、フックもデカルトなどの先人たちに負っている」ことを述べている。重力に関してのフックとニュートンの貢献については、山本義隆『磁力と重力の発見 3 近代の始まり』（みすず書房，2003）。

(11) 伊東俊太郎『十二世紀ルネッサンス』（講談社学術文庫，2006）97 頁。この後は、「しかしそれは我々自身の眼が鋭いからではなく、また我々自身の背丈が高いからでもなく、まさに我々が、その巨人の丈をもつ人々によって高く掲げられ担われているがゆえなのだ。」と続く。西洋において最初の大学 university（ボローニャ大学やパリ大学そしてオックスフォード大学やモンペリエ大学など）が自然発生的に成立する前夜、「先駆者たちの偉大な学術のおかげで新しい地平が見えるようになったという（言わば感謝の）意識の表明であると同時に、その先駆者たちの肩の上に乗るがゆえに、その先駆者たちすら超えて、もっともっと遙かな地平を見渡すことができるであろう、という未来への希望の宣言ともとれる」そのような認識が生まれた。そしてこの認識は、ニュートンを経て、（さらに 20 世紀のオルテガ・イ・ガセットやカール・ポパーを経て）現在に伝えられることになる。

(12) 西郷隆盛の『偶成』（あるいは『感懐』）と題した七言絶句の（起承転結の）起句が、幾歴辛酸志始堅（幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し）。丈夫玉碎恥輒全（丈夫は玉碎すとも輒全を恥ず）、我家遺法人知否（我が家の遺法人知るや否や）、不為兒孫買美田（兒孫の為に美田を買わず）、と続く。旧出羽庄内藩の関係者が西郷から聞いた話をまとめた『南洲翁遺訓』の第五条にもあり、そこでの転句は「一家遺事人知否」。この漢詩のあとに「若し此の言に違ひなば、西郷は言行反したりとて見限られよと申されける。」とある。大岡信『折々のうた』（岩波新書，1980）164 頁、林田慎之助『漢詩のこころ 日本名作選』（講談社現代新書，2006）225 頁、長田弘『なつかしい時間』（岩波新書，2013）80 頁なども参照された。

(13) 『論語』雍也第六の二十。子曰、知之者不如好之者（これを知る者はこれを好む者に如かず）、好之者不如樂之者（これを好む者はこれを楽しむ者に如かず）の後半。楽しむことが最強である、というのは 2,500 年前の孔子以来の（そしておそらくそれよりもずっと以前からの）人類共通の認識だった。